
異世界冒険モノ（タイトル仮）

年齢をとっくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなもものようなりんご的ななにかだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界冒険モノ（タイトル仮）

【Nコード】

N0305Y

【作者名】

テスト中の小説集書いてる適当な年齢をとくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなものようなりんご的ななにかだと思わせ
て Jewel 状の物体その2

【あらすじ】

異世界に召喚されたいらしい成り上がり家庭のお坊ちゃま。とてもお坊ちゃまとは思えないほどの言葉遣いではあるものの、真正正銘のお坊ちゃま。馬鹿を演じているが、中身は超腹黒。

注意

更新ペースは不定期です。言葉遣いが荒いためご注意ください。ご

都合主義が含まれています。ハーレムはありません。主人公滅茶苦茶強いですが、はじめからチートではありません。今後キーワードが増える可能性があります。

補完資料（前書き）

地図と共に国家ごとの特徴を書き記します

補完資料

> i 3 3 8 2 5 — 4 2 9 2 <

【商業国アラビア商国】

その名の通りの商業国。商業ギルドの本部がある。この商業ギルドが国のトップである。商会20組の議会制で、市場の流通価格や販売基準、販売方法や契約法律など様々なものを決めている。

国民の大半は商人で、他の国に行商へ行くものも少なくない。商人以外は農業や漁業、商会の下働きをしている。基本的に国民性は働き者、武力ではなく金や舌で勝負する。争いごとを回避する傾向があるが、商人になる最低限の戦闘能力を国民が所持しているため、戦争になれば他国に引けを取らない。

現在は奴隷商人について認めていないため、奴隷商人の絶対数が少ない。

『同盟国』

すべての国家（ソロノア・ヴルジア・ガディア・フレジア）

『敵対国』

なし

【中立国ソロノア連邦】

中立国、と言うがヴルジアとの間で小競り合いが絶えない。もちろんソロノアが仕掛けたわけではない。都市のひとつが冒険者ギルド本部を中心として形成されている。

大きく5つの都市に分かれており、国の中心は砂漠になっているため、都市が築けない。5つの都市が同盟を組んで国家を形成しており、それぞれの都市での相互支援、人員移動、基本的な法律の統一化が成されている。

国民の大半は農民で、国民数が他の国の倍近くいる。また魔術師が多く、武人は少ない。国民性はのんびりしている者が大半で、神経質で真面目な人間は他国へ流れていく。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ヴルジア

【軍事国家ヴルジア帝国】

紛れも無い軍事国家。侵略と侵略と侵略を繰り返す血の多い国。ソロノアとガディアに攻め込んでいるが、なかなか落とせずに冷戦状態となる。

首都と2つの砦で成り立っており、地図右奥に進むと魔物が大量に発生しており、背後・前方2国の3つと戦っている。

首都には皇宮があり、王族が暮らしている。王族は代々優秀な武人であり統治者としての能力も兼ね備えているが、代わりに魔力を持たないという特徴がある。王族と婚姻するためには実力を示さなくてはならない。

（例：武術大会優勝・ギルドAランカー・戦時に功績を挙げる・魔物の侵攻時に功績を挙げる、など）

貴族はおらず、魔力を持つものが圧倒的に少ない。代わりに『闘技』と呼ばれる業を使う。武人が多く、アラビアに頼りきっている傾向がある。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ソロノア・ガディア

【神聖国ガディア神国】

神を崇める国家。実際に神は居るので宗教団体ではない。ウルジアとの戦争で手一杯のため、ソロノアとは敵対していない。

神殿の有る場所が首都。神様至上主義。神に祈りをささげ『神術』を使える者が一番偉いと思っている。神官長・貴族（神官）・信奉者・その他の順に偉いという思考。

民のほとんどが神様至上主義で、貴族が多い。神官長は貴族にしかなれないが、平民でも神官になることは出来る。

神術が使える後継者が居ないと平民に落とされる。逆に平民でも貴族になることは出来るが、条件が厳しい。

法律も『神の名の下に』行使されるため、神を欺かなければ公平な判決が下る。魔術師を毛嫌いする傾向は現在のところないようだ。

『闘技』は扱えない者が大多数。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ウルジア

【亜人国フレジア】

人間族以外が住む国フレジア。魔の森に面しているが、亜人の特性を生かして退けている。

それぞれの集落があり大体の縄張りも決まっているが、助け合いながら暮らしている。

亜人としてはエルフ・ドワーフ・獣人・竜人など様々な者がいる。年に一度、各種族の長が集会を開く。現在の集会長はエルフの長がつとめている。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

魔の森？

【魔の森】

強力な魔物が徘徊する森。中心部はAランカーがパーティーを組んでも怪我を負うほどの強さ。

まとめ役はドラゴンの様ではあるが、魔族の姿が見かけられるようだ。

> i 3 3 8 2 6 — 4 2 9 2 <

？

様々な集落が点在している。亜人族しかない。海に面しているが、海にも強力な魔物が多く魚はほとんど取れない。

？

強力な魔物が生息している大陸—大きい森。？には森が地続きになっているので移動できる。

魔物は森から500m以上は離れられないようだ（他の森も同様）。
どうして離れられないのかは学者達が首をひねっている。

最近魔族が動くようになった、と冒険者からの報告が上がっている。

？

商国の主に農業地域

国境線がゆるく、亜人の通り道にもなっているのは周知の事実。商人は亜人を商売相手としてみるため、毛嫌いしない。

？

商国の主に漁業地域

ガタイのいいおっちゃんが多い

？

商国の主に産業地域

技術者が多い。神術士、魔術師、闘士（別名：武人）なども研究材料として借り受けている。もちろん給金も有る。

？

産業地域に隣接しており、人員の貸し出しをする代わりにいち早く品を手に入れることが可能。
主に魔術師が住んでいる都市。

？

冒険者ギルドの本部がある街。つまり冒険者の町。登録もここで行えない。

亜人を差別しない街でもあるため、ここにきたがる亜人も多い。

？

鉱山都市と呼ばれている鉱山がたくさんある都市。
武器の生産が主な仕事。

この都市以外でも生産されているが、数を作るのはこの都市が適している。

？

スラム街。ああスラム街。スラム街。

スラムが多く、すべての孤児がここに住んでいるといっても過言ではない。稀に神聖国ガディアが施しを行う。

ここのリーダーが実質上の街のトップで、さまざまな外交をこなしている。

スラム街といっても（死なない程度の）最低限の生活は行えるし、派遣の仕事が大量に入ってくる。

暴行は多発するものの、殺しなどは罪に問われるため半殺しが多い人数が多く、それなりに強いものが多数。冒険者の大半はこの出身。

？

最強の都市。ソロノア。

人数が一番少なく土地の範囲も小さいが、戦の才能を持つものがここに集まる。

実質上のヴルジアとの戦争相手。

数より質のこの国家は国民の総意で代表を決めるというアメリカンな都市。

好戦的なものも居るが、大抵は温和。強すぎるために弱い相手とは戦いたくないというのが彼らの思いのようだ。

(例：国家の最強100：ソロノアの民30：兵士1：一般人0・5)が目安の強さ。

国の民の中で決闘で決着をつけることが多い。余談だが、夫婦喧嘩も決闘で収まるという・・・。

？

ソロノア攻めの主要の砦、街というほど民間人数は多くない。基本商人と武人が多い。

？

帝国の中枢、皇宮が有る場所。男でも女でも強ければいい街。

4年に1度だけ武術大会が開催され、その間と前後は戦争をやめる。武術大会中は大陸一の賑わいを見せる。

亜人も強ければ尊敬の目で見られる。

？

ガディア攻めの主要な砦、街というほど民間人数は多くない。基本

商人と武人が多い

？

神殿が存在する街。

神術士が多く、神が光臨する街。

？

古代の遺跡があり、魔物が徘徊している。

Cランク以上の冒険者がそれに準じる強さが無いと入れない。

現在はダンジョンと呼ばれ、地下62階層まで攻略は進んでいる。

1階層ごとに強力な魔物が出てくる。77階層が最終地点だということ。50階層時点では強力な魔具が多数存在している。

お坊ちやまの生活（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

お坊ちやまの生活

とある高級マンションの一角。そこには俺の寢床がある。

3LDKという無駄に広いこの寢床で寝るようになってから2年。

俺は特に感慨を抱くことも無く来客用に設置したはずのソファに寝転がる。

一人暮らしだからといって別に両親がいないわけではない。おそらくは両方とも健在だ。

成年したわけでもなく、未だ高校2年の俺はあの居心地の悪い家に居続けたくは無かったのだ。

うちの両親は良くも悪くも放任主義だし、金も有る。

会社を設立し、1代で富と名声を築きあげたやり手な父親。それを影ながら支える母親。

普通ならば跡を継ぐのだから厳しく教育されると思うだろう？でもそれはありえないんだ。

なぜなら俺は2番目だから。次男であるからして継ぐのは長男に任せるのが筋だろう。

だからこそ俺はまるでいないように扱われてきた。使用人ですら俺に敬意を払うことはしない。

[illegible]

【2年前】

いい加減クソ兄貴のまだ居たのかとでも言いたそうな視線と、使用人の甘い汁を吸おうとする者への妬みの視線がうざったくなくなってきた。

「別の場所で暮らすから金くれ」

そう言うとき我が家のソファに座る馬鹿親父が、俺の予想したとおりの行動をとった。

突然立ち上がるとリビングから出て行き、俺を手招きする。

それに素直についていくと、木製の扉の前に辿りつく。馬鹿親父の部屋の扉なのだが、実際は滅茶苦茶高性能だ。

馬鹿親父は横の壁の一角を押し込み、その上に現れる網膜認証装置に目を当てる。

「認証されました」の声と同時にガゴンと扉が上にスライドする。厚さが50cmはある表面だけ木製の鉄扉だ。

部屋の内部に入ると、きちんと整えられた本、本、本。

壁一面が本棚だらけの図書館のような部屋、広さは20メートル四方程度。

ある一箇所の本棚の前で本を数冊抜き差しすると、本棚が手前にゆっくりと移動する。

本棚の裏側にあつた穴には入らずに本棚があつた場所の床を探ると、穴の奥から「ゴー」と重厚な音が聞こえてくる。

「ももとの穴は罠が張つてある。お前も入るときは注意しろ」

音が鳴り終わるとジュラルミンケースの山が現れる。そこは金庫であり、一つにつき5000万円ほど入っているらしい。

ポイツと5000万円ほど入ったジュラルミンケースをまるでペツトに餌でも与えるかのように投げて寄こしてきた。

（まあ、厄介払いといえは正しいか）

俺はそれをうまくキャッチして馬鹿親父に話しかけてみる。

「縁は切らないのか、体裁悪いしな」

「ああ、そうだ。お前は理解が早いが、次男だからこそ邪魔になる。金が入り用ならいつでも払おう。」

穴の中のボタンを押して出てきた馬鹿親父は、本棚の本を元に戻しながら声だけをこちらに届けてくる。

「そうかい、次男は独り暮らしを夢見て出て行った。心配だから金は渡してあるし見張りという名の監視もつける、ってか？」

本を戻し終わり、本棚が移動するのを確認したあとこちらに鋭い目を向けてくる。

「本当に理解が早くて助かる。うちの邪魔はするなよ」

「わあつてるつて。ああ、もし俺が行方不明になったら馬鹿が金を持って逃げたつて設定でよろしく」

「こちらとしても行方不明のほうがありがたい。後継者は長男に決まっているというのにお前に取り入ろうとする奴等が多くてたまらん」

この言葉だけで伝わるだろう？と挑発を混ぜて織り込んだ言葉に顔色を変えずに返答してくる。さすがだな。

「馬鹿だという設定だしな、操りやすいとも思ったんだろ。いつも通りの馬鹿を演じておいたよ」

「じゃあな、馬鹿息子。お前は私の血を色濃く受け継いだのだから大丈夫だろうとは思うが、惜しいな」

「じゃあな、馬鹿親父。一番の後継者を手放したことを一生涯悔いと良いさ」

これはいつもの会話、だがやはり少量の悲しみが混ざっているのは仕方ないといえるだろう。

『最後の別れ』では無いものの、家族としての会話はこれで終わり。今後は取引相手として話しをするだろう。それが俺と馬鹿親父という親子の形であった。

俺のメリツトは『兄』と『権力を欲する者』からの解放。さらに『金』と『身を守るための権力』といったところだろうか。

馬鹿親父のメリットは『後継者の確定』、先払いとして『反逆の意思を抱く者の特定』。そしてその他もろもろの小さいメリット。

(ちって、とりあえずむところでも探そう)

[illegible]

あれから2年、俺は高級マンションの一角にある部屋を馬鹿親父に金を払わせて買い取った。

高級マンションと銘打つだけはある、とても綺麗な場所である。

馬鹿息子が家出先として選ぶ場所としては申し分ない上に防犯もきっちりとしている。

巡回中の警備員は1階に10人、その後は階毎に5人ずつ配置されている。

警備員は強制的に住民の顔をすべて覚えさせられ、黒服にサングラスという怪しさ極まりない格好をしている。

防犯カメラは外周に1メートル間隔で配置されており、侵入者を監視している。

住民は女性8割男性2割といったところだ。お嬢様がほとんどで、警備員とは別にボディーガードをつれている。

男性陣も名家の御偉いさまがほとんどで、間違いが起こっても申し分ない身分ばかりだ。

俺は成り上がりなため、好印象はもたれていないが警戒もされてない。

俺の演技の賜物だろう、社交パーティーではあらゆる女の子に声をかけては俺のボディーガードに引きずられていく。

最終的にボディーガードが引きずっていくため、娘の『お話し相手』と『社会勉強』としては申し分ないだろう。

俺のボディーガードは8人で、側で控える2名と影から観察する2名が基本配置で、それを1時間毎に片方ずつ交代する。もちろん休み中も緊急事態に備えて待機している。

休みは1年に数日程度だが、日給10万程度なのだから破格の待遇といえるだろう。

年齢は現在25〜30歳で構成されており、定年は35歳ほどで、定年後は家付きの執事として雇われる約束だ。

話が長くなったが、この8人は馬鹿親父の手の者であり俺の暴走を止めるための人物であり、俺の休む暇がほぼ無い。

トイレの時と学校の授業中以外は側に必ずついているため、本性が出せずに馬鹿息子を演じるしかない、忌々しい。

（身動き取れねえじゃねえか、いつそ本性晒すか？ダメだ、メリツトが小さすぎる）

ソファに備え付けてあるクッションに顔をうずめながら苦い顔をする。

以前の生活なら馬鹿親父と母のみの場所のなら本性を出すことが出来た。以前の生活が恋しくなってきたが、それに蓋をして考えをめぐらせる。

（おそらくだが、ボディーガードの目を振り切り田舎へ逃亡すれば馬鹿親父は搜索を中断するだろう。母も俺の本性を知っているから止めはしまい）

（だとすると、ボディーガードを振り切るしかないわけだが・・・）

俺は考えをめぐらせ、一番馬鹿で大胆な、しかし成功の確率が最も高い方法をとることにした。

（勝負は、明日）

異世界への入り口（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

異世界への入り口

「う．．．う．．．」

体が動かない。

「たかひさ隆久様、お水でございます」

そばにいたボディーガードの一人がコップを傾けてくる。

「ぷ．．．はあ．．．」

コクコクと飲んだ後、ゆっくりと意識が覚醒してくる。体の節々が痛いのはなぜだろうか。

「おはよ、いま何時？」

起き上がり、寝ていた場所がソファであったことを思い出して一人納得する。

体の痛みが取れるわけではないのだが、原因が分かってやっと一息つける。

「現在7時半でございます」

この寢床から学校までは徒歩10分ほどだ。元々、高級マンション自体がうちの幼稚園組みから大学までのエスカレーター学校専用に使われたらしいから納得だ。

もちろん駅も新しく増設されているし、タクシー乗り場なんてものである。生徒以外でもすみたがる者は多い。

「制服の用意と朝食を頼むよ。朝食が先でよろしく」

俺が朝食を用意すると怒られるため、いつも通りに朝食を頼む。

しばらくすると香ばしい匂いと共に焼き魚・きのこの混ぜご飯・お吸い物・ほうれん草のおひたしが出てくる。

「いつも思っただけどさ」

「なんでしよう隆久様」

「こんな庶民じみた朝食でいいの？俺が頼んだせいだろうけど」

そう、飯にもお坊ちゃんなのだ。庶民然とした生活でよいのだろうか。

「隆久様は次男でございますゆえ、自由に生きていただいてよろしいのではないかと」

「だよなー」

俺は適当に返事を返す振りをしながら自由を勝ち取るために動き出した。

異世界への入り口（後書き）

眠いので一端閉じます。朝再度更新

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305y/>

異世界冒険モノ（タイトル仮）

2011年10月31日03時05分発行